


 書評

小椋 力 著

予防精神医学

脆弱要因の軽減とレジリエンスの増強

鈴木道雄

わが国の予防精神医学の先達による包括的なモノグラフである。

近年、オーストラリアや英国を中心に始まった早期精神病 early psychosis への介入・予防活動が世界的な広がりを示し、わが国においても早期介入や予防にかつてない関心の高まりがみられている。著者の小椋 力・琉球大学名誉教授は、本書中に記されているように、公の場で精神障害の予防について語り難い雰囲気が強かったわが国で、1990 年に予防について口火を切って論じ、1994 年に大学生を対象に早期二次予防活動を開始し、2001 年にはわが国初の予防精神医学領域の国際学会である第 1 回日本国際精神障害予防会議(2001 年)の会長を務めるなど、文字通り日本の予防精神医学を牽引してこられた。本書には、わが国における予防精神医学の発展の歴史も含めて、予防精神医学の概念が包含する内容について、著者の未来志向の視点から余すところなく語られている。

ほとんどの精神障害の病態はまだ解明されていない。病態は解明されていなくても、本書の副題にあるように、脆弱要因の軽減と防御・回復要因(レジリエンス)の増強によって、一次予防(発症予防)、二次予防(早期発見・早期治療)、三次予防(再発予防)のいずれの段階においても、精神障害の予防に近づくことができる、というのが本書を貫く基本理念である。また、本書全体を通じて、該博な知識と先行文献から取捨選択されたエビデンスに基づく実証的な記述となっているので、大変読み応えがあり有益である。

本書は 9 つの章から成り、第 6 章までが総論、

第 7 章以下が各論と言えるだろう。総論の部分では、予防精神医学の概念と歴史が詳述された後、費用対効果および倫理という、避けて通れない課題についてきちんと書かれ、精神障害の脆弱要因とレジリエンスに関する知見がまとめられている。最も多くのページが割かれている第 7 章「主な精神障害・病態の予防」では、神経発達症群から認知症まで、ほぼすべての精神障害の予防について、さらには自殺予防や精神障害者による犯罪予防についても論じられている。しかも、これらの障害に関する脆弱要因、レジリエンス、発症予防、早期発見・早期治療、再発予防についての知見が、可能な限り文献を渉猟してまとめられている。次の第 8 章「各領域における予防対策」では、家庭、学校、職場、地域において可能な予防対策について、豊富な具体例とともに書かれている。第 7 章を経糸とすれば、第 8 章と第 9 章「早期治療・再発予防のための治療法」は緯糸であり、早期介入・予防活動の現状と課題を理解するのに大変役立つものとなっている。

本書は、精神障害の予防や早期介入に携わる専門職が知識を整理し、より深い理解を得るのに有用であり、常に手元に置いて参照するのに適している。また、この領域に関心を持つ初学者が最初に通読するのに最適な本格書でもあり、多くの若い世代にぜひお勧めしたい。

(富山大学大学院医学薬学研究部神経精神医学講座)

●A5 280 頁 2016 年 定価：本体 2,900 円＋税 星和書店刊